

2017 年 12 月集会 田中宏特別報告

山東省棗荘に任世淦先生をお訪ねした話をする前に、孟国祥先生のお話を聞きながら、このことだけは発言しておきたいと思ったことについて先に触れたいと思います。ご存じのように 1985 年、戦後 40 年の 8 月 15 日に南京に南京大虐殺の記念館がオープンしました。その日に日本の中曽根首相は、戦後の総理大臣として初めて、靖国神社を公式参拝しました。これは、大変大きなアジアからの反発を招きますが、翌年 7 月中曽根さんは、衆参同日選挙を実行して、いまでも覚えています、304 議席を取って大勝したのです。しかしその年には中曽根首相は靖国には行きませんでした。その時の官房長官が後藤田正晴で、彼は、なぜ首相が靖国に行かないかという説明をするときに、実はいま孟先生が言われた、サンフランシスコ講和条約 11 条で、日本国は戦争犯罪法廷の裁判を受諾していることに鑑みて見送ることにしたという発言をしました。ですから、孟先生は、今日は南京の軍事裁判を中心に話されましたが、最後のところで東京裁判、とりわけ講和条約 11 条でこれを承認していることについて話されたので、確認しておきたいと思ったわけです。

それからもうひとつ言っておくと、皆さんは南京の大虐殺記念館に行かれた方が多いと思いますが、実はあの長い館の名前、「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館」これは鄧小平の揮毫です。あの大きな記念館が出来つつあることを、中曽根首相が知っていたのかいないのか、それがオープンする日に、こともあろうに、東条英機が祀られている靖国神社を参拝するという、この歴史のギャップ、これが今なお問われているのではないかと思います。

前置きが長くなりましたが、今日私が特別報告としてご紹介したいのは、南京大虐殺に関連して、もう亡くなられましたけれども、南京大虐殺から 50 年の時、今年が 80 年ですから 30 年前ですが、その時に、自分は南京大虐殺の時にその場にいた日本兵だとして、そのことを率直に告白して中国の人にお詫びするという行動に出た東史郎さんに関してです。戦後 50 年の 8 月に京都で開かれた「平和のための戦争展」の場に、東さんは当時の日記を初めて公開することに踏み切りました。そしてその年の暮れ、87 年の 12 月 13 日に大虐殺記念館を訪れて、初めて中国の人にお詫びをしたのです。その時、東さんは、自分は必ず南京で復讐されるだろう、それでもいいと思って、おそろおそろ行っただけでも、中国の人は許してくれた、ということと言われたというのが非常に印象に残っています。

その 87 年、東さんは、日記の一部を『わが南京プラトーン――召集兵の体験した南

『南京大虐殺』（青木書店）として出版しました。30年前なので記憶が薄れている方がいるかも知れませんが、その2年前に、実は米国のベトナムでの虐殺を扱った『プラトーン』という映画がすごく大きな反響を呼びました。それとの関係で、出版社は『わが南京プラトーン』という題をつけたのでしょう。東さんが戦時中に書いていた日記の南京の部分を1冊の本にして出版したのですが、この『わが南京プラトーン』は、とんでもないことに巻き込まれてしまいます。その本の中にいろんな虐殺の場面が描かれていますが、東さんが属していた部隊の分隊長が、東さんの記述によって名誉毀損されたと言って、本が出た6年後の93年に東さんを相手にして名誉毀損裁判が東京地裁で始まりました。新しく出したこの『東史郎日記と私』の「あとがき」に書いたと思いますが、その背景はこういうことです。

元陸軍将校の親睦団体・偕行社刊の『南京戦史』の編集委員でもある板倉由明氏は、「筆者は西本氏に『資料集』〔＝『南京事件―京都師団関係資料集』青木書店 89.12〕のことを話し、『東日記』にある西本は貴方であると告げた。西本氏が本気になって旧戦友の東氏と戦う決意を固めたのは、この時からである。……この訴訟は、一見西本氏個人の名誉回復を目的としているようだが、これを突破口として、歩兵20〔連隊〕の残虐行為の虚偽を証明し、さらに、いわゆる『南京大虐殺』の虚構を明らかにできれば、日本国全体の利益とも合致する。東―青木〔書店〕ラインに鉄槌を加える機会が、ようやく西本氏及びそのご家族の犠牲的行為によって訪れた」と述べている（『月曜評論』1993,5,17）。

こういう完全に仕掛けた裁判です。裁判は本が出た6年後の93年に始まり、最終的に最高裁でも負けました。従って東さんの日記の一部は記述が間違っていることが日本の法廷で確定したことになるのです。東さんの『わが南京プラトーン』は日記の一部ですが、東日記の全体が熊本出版文化会館から2001年に出されますが、その前の1999年3月に中国語版が江蘇教育出版社から出版されます。実は中国語版の『東史郎日記』が出版されたところから、この『東史郎日記と私』の著者任先生の活動が始まります。

日本で東さんが裁判で負けても、まだ最終判断には行っていない時点で、この本の著者である任世淦先生は、高校の歴史の先生でしたが退職した後、この『東史郎日記』の現場検証を始めたのです。本日の配布資料の最後に、ちょっと見にくいですが、東史郎日記の中国語版の写真があります。その右に、その本の一部を今年おじゃましたときに撮らせて貰った写真があります。本の余白に任先生がいろいろと書き込みをしているのです。そこに書いてある事件とか登場する地名とか、そこをこつこつ訪ねて、例えば、こういう事件があったとか東さんが書いていると、その場所はここだから、そこでこうい

う事があったという村の人に話を聞いて、東さんが殺したといわれる人の遺族を捜し出しているのです。あるいはいろんな事件で、捕虜の虐殺だとか、日本兵が同僚の日本兵の弾に中って死んだという事件が起きている、それはどこだったか、井戸のそばだというとその井戸はどこだろうと捜している、そうやってこつこつ調べて書き上げたのがこの『東史郎日記と私』です。

もう一つは、なぜこれが書かれたかということですが、日本一部では『東史郎日記』はデタラメだとなっているが、自分の住んでいるところで、東さんの部隊が何日にどこに来て、どこに泊まったとか、どこの寺で何をしたとかいうことがあると、そのお寺を訪ねて行ってその時のことを聞いているのです。そうすると、ああ、あの時のことだということが分かる、そういう形で出来上がっていったのです。

ぜひ東さんの名誉のためにも、それから今日、孟先生が具体的に南京法廷さらには東京裁判のなかでどれほどの材料、証人を立てて具体的な犯罪行為を裁いていったかというプロセスをご紹介いただきたいと思います、この『東史郎日記と私』は、まさに一人の退職教師がこつこつ調べ上げたもう一つの「証拠」なのです。

もう一つ言っておかなくてはならないのは、実は任先生はとうとう東さんに会うことができなかったのです。結局直接会う前に、2006年1月に東さんがなくなりました。だから、直接会うことはなかったけれども、中国語に訳された『東史郎日記』をいつも持ち歩き、それを通じて村人と話をして東さんの存在を確認してきたのです。この本のなかには書かれていますが、村人を訪ねたときに「今日は日本兵を連れてきた」というので、村人はびっくりするのです。どこにいるのだろうか。「実は昔は鬼だったけれども、今は心優しい日本兵を連れてきたのです」「その人の日記に、あなたの村のことがこういう風に書いてあります。そのことについて話してほしい」と取材を続けていったのです。

過去の歴史とどう向きあうかという大きな問題を抱えていますけれども、東さんはある意味ではシンボリックな人です。あれだけの南京大虐殺事件があったけれども、それを加害者の立場できちんと謝罪し、日記を公開したのは東さんだけです。今日の会合に実は任先生をお迎えしたいと思って、今年訪問したときをお願いしたのですが、ちょっと奥さんの体調がすぐれないので、今年は無理をしないことにしました。ご本人も81歳ですから、本当は来ていただいて、こういう場でその思いを語っていただきたいと思いましたが、それができないので、この本をみなさんにお届けすることをもって任さんの思いを日本側に紹介できればと思って、貴重な時間を「特別報告」として取らせてもらいました。ありがとうございました。